

秀歌三十首十今年の収穫

住正代

炎天に立つ陽炎のわれにしてゆらゆら進む向

日葵の道 十月号・高山 邦男

かかるものに向き合ひ心癒さるる盆栽の陰の

子猫三匹 佐藤モ二カ

駿河湾の光を孕む病院にツバメらは来ぬ風を

あつめて 松岡 秀明

戦前が生きている町椰子並木住み分けられて

我等日系人 十一月号・青木 泰子

積み上げた果実の甘き香りして髪結い町の空

気の粘り 佐久間得幸

爆死者をすがらに焼きし校庭にトンボの羽を

たばさみ遊びき 小川 裕子

流浪する人のこころを待ちし夜もこの窓に見

き遠い火花を 田中 薫

生きてゐる大儀大儀と鍬を杖に秋時き野菜の

諸々時けり 十二月号・田中 江子

わがままな息子が潰す九条か夾竹桃が火を噴

く国に 鳥山 順子

遠き日の米軍上陸思わするポトびつしり辺

野古の海は 比嘉 弘子

黒猫は子供の面差し白猫は老成のそれ春草の

猫 一月号・森屋めぐみ

シマトリネコの花の並木の坂下の薄もやの奥

〈みなとみらい〉は 岡田志津枝

庄川の五箇山の紅葉めぐり来て家の銀杏の黄

に迎えらる 二月号・水口 良子

池の上に敷かれたる空シベリアの青さ沁み入

る鴨迎へたり 西川 和榮

午前十時の霧晴れねども雁皮紙をいちまいは

がせるほどの明るさ 三月号・水口奈津子

七沢の日向薬師の道行けばあの日かの日の父

母のかげ 高島とよ子

三瓶山見ゆれば浮かぶ「搾乳牛百頭」の夢語

りたる人 四月号・福原 美江

いつの間に髪と肩とがしつとりと濡れてみて

ああ霧が降つてゐる 森本壽々子

風の巢の宿木に風の雛たちは身を寄せ合いて

眠りに就かむ 片山 紫

他人事ひとごとに出没談議聴きいしが角立て過るこれ

やこの鹿 土屋 信子

初雪に抱かれ月に抱かれて墨絵のように眠る

町並み 五月号・本田真奈美

水仙と楓が生うる裏の庭いまさぬ竹山広をし

のぶ 井上 俊英

くちばしに雨をくはへて訪ね来る鳩のやうな

りわたしを濡らす 岸並千珠子

入試終へし子と目が合へばわらわらと泣きた

き顔で我を見つむる 六月号・山口 明子